

一九六九年（五九歳）

六月十三日

鱒ヶ沢から帰ったのは夜の十二時すぎ。六時半電話で往診に起こされグロッキーになり、リタリンをのんでねむ気をさまして一日診療する。

六月二十二日

分院患者の運動会。去年の人がことしもおりそれが悲しい。この間の聾学校の運動会といい、きょうのうちの運動会といい、商品が貧しくわが胸いたむ。めしいたる神経にてけんめいに走り小さきくぼみ、つまずきたおれ口かみしめて、そのくぼみにらみつける。

〇〇さんという女の患者さん、もう三十歳にもなりましょうか。入院してきたのは七、八年前。顔も洗わない、おしっこも垂れっぱなし、棒立ちにばかりなり。運動会につれてきても、走るでもない、笑うでもない。植物のようにつつ立っていたのに、きょうの運動会ではけんめいに、そしてじつによく走り、勝てば手をたたくほどになっており、何よりもよろこばしい、何よりの収穫である。

七月七日

十二時ちかかった。着物に着かえ小便しおわると電話。

“津川さんですか、”

“そうです、津川です、”

“いいんです、いいんです、”

“……”

“選挙はがんばってください、”

“ありがとうございます、”

“しかし、白色テロもあるし、赤色テロもあるからなあ……… 絶対に当選させないようにはしてみますから、”

電話はそこでとだえた。昭ちゃんと大橋さんに来て貰い、妻をいれて四人で相談し、昭ちゃんと大橋さんに泊まってもらい。私はベッドにもぐりこむ。

七月二十七日

“医療を民衆の手で” の原稿書きはじめる。

八月五日

病院金融のことで袴田さんを訪ねる

十月二十九日

久しぶりに結核病棟をまわってみる。入院して長い日がたっている女患者さんたち泣いて喜んでくれる。

十月三十一日

四病棟をまわってくる。中風で入院している人たちに泣かれる。

十二月七日

総選挙公示。雨しきり。われ立候補して街頭にたてば、一本の傘によりそい、きいてくれる主婦。

十二月二十七日

スキーを借りてすべってみる。ころばなかった。

投票する。

勝った、勝った、ついに勝った。四七、五九〇票、なんとすばらしい数だろう。しかも二位。万歳、万歳、とどろく声。待っていた津軽の夜明けが、いま、県民の手できりひらかれたのである。

一九七〇年（六〇歳）

一月二十八日

東京に移る日が近くなり、方々を挨拶しまわる。疲れてしまったのだろう、腰がおもい、腰がいたい、やたらにねむたい。一昨年九月にはじまった選挙闘争がどうやら一段落したのだ。あすからは国会の仕事に専念しよう。

医療単価も三月一日からあがるので病院もあまり心配なくなった。

二月十三日

夕方から、民青東大医学部班が私を囲む座談会をやってくれる

四月六日

一日、院長と医師の仕事をする。九時からの午前中診療という規定の診察室に入り午後二時ちかくまで八〇人からの患者の診療をやる。まったくひどい。時間が充分でないので、さぞかし粗末な診療であったろう。胸がいたむ。

五月四日

よる病院の総婦長、婦長、看護主任と懇談する。看護婦さんは苦勞に苦勞をかさねて

いる。私が国会に出る準備をはじめ国会に当選してしまってから、はや六ヶ月はすぎた。その六ヶ月に神経科の医師は九回も変わった。変わるたびごとに治療方針が変わってしまい患者たちはどの医師の言を信用すればいいか分からない。その度ごとに看護婦にだけ苦情を持ちこむ。看護婦たちとしても新しくやってきた医師のやり方が分かりついてゆけるところまでくると、その先生はもういない。その苦勞を、私はいちいちうなずいてききつづけた。

五月二十六日

分院にいたり、入院中の〇〇という患者の財産と人権をまもるために森先生と相談する。精神障害者の人権こそ何にもまして尊重したい。

八月十七日

午前診療、当選以来では一番患者が多い

九月一日

関東大震災の記念日。私の中学一年生のときであった。大災害を報ずる夕刊にしがみついた日のことを忘れていない。

日本にセツルメントがはじまったのも震災からであった。東大の校庭や三四郎池のほとりに避難してきた民衆の尿や糞はあたりにたちこめたが、それに対して政府も東京市もなにもやって来なかった、打つ手がなかった。それを片付けたのが東大の学生であり、その学生たちがそれにつづいてくりひろげたのがセツルメント運動である。

十月二十三日

青山の宿舎にたどりついたら、人見先生死んだとの報、三上専務よりとどく。人見先生、バカバカ、何で自殺したのだ。人見先生、お前のバカバカ。

被害妄想のあった人見先生をひきうけたのは二年前であった。人見先生は前かがみ、あまり口をきかない。口をきけば、きいたことに対してせつかけである。看護婦たちは、そんなときにさわらぬ神にたたりなしで、先生を敬遠した。

私はそんな先生の心境を察し、私が診ている精神科の患者で内科的所見のある人を人見先生のところにまわしてやった。先生の気をひきたてるためであった。患者と人見先生の気をひきたてるための道具に使ったのである。それは人見先生に対しても親切ではなかった。

ほんとの友情は人見先生の心の悩みにふれてゆくことであったのに、私はそれをしないで人見先生と表面的な義理でつきあっていた。それも一因になって先生は死んでいった。

反歌

思うどち

心の底わって

話してこそ

あつ土とても

ゆるがすことなきを

十月二十七日

人見先生の葬式。まじめな人であった。まじめすぎたとも言える人であった。誠実な人であった。ひとりひとりの患者のひとつひとつの症状に全力投球の治療をした。そんな先生がもういない。人見先生、惜しんでも、惜しんでも、あまりがある。

それにしても、先生、なぜ死んでいった。先生が死なれたことで、私の胸はいたみ、責任をいたくいたく胸に抱きしめている。抱きしめたから、どうなるというのでもないが、抱きしめている。

十一月二十二日

弘前で第十一回酒の害から家庭をまもる大会

やりつづけること十一年、やってよかった、やってよかった。かつてのわれらの津軽は、酒の上での尊属殺人は日本一であったのに、われらがこの運動をくりひろげてからは次第次第にへり、昨年も今年も一件もなくなってしまった。その意味でも、やってよかった。やりつづけよう。

十二月二十七日

この月三日目の診察。それもいつものように午前中だけの診察。あいがたいことに九七人も来てくれる。ありがたかったが、済まなかった。九時から一時までの四時間に九七人。一人一人丹念にみようにも時間がたりなくて済まなかった。東北大の医学生の三人にも済まなかった。折角私の診察を見学にきてくれたのに一人三分間という時間では、診察の意をつくせなかった。